

「柔」と「剛」

村上 武雄

今は亡き大平前総理大臣の思い出として、エネルギー業界に身をおく私にとって、今なお心に強く残っているのは、何といつても昭和五十四年六月に開催された「東京サミット」におけるホスト役としての活躍ぶりである。昭和六十五年に至る先進国別の石油輸入目標をとりまとめる極めて重要な役割を、主催国日本の首相として務めることになったのだが、石油輸入依存度が先進国のなかで最も高いわが国が、石油輸入量を限定することは、わが国の経済成長に自らの制約を課することになるだけに、誠につらい立場であり、「苦勞も多かったことと推察していた。この会議では、それぞれ全く異なる国内事情を背景とした国家的エゴイズムのぶつかり合いのなかで、「対話」を通じて先進七カ国首脳の政治的良識が発揮され、厳しい国際情勢に対処するための調整が成立した」とは、大きな意義があったと思う。とりわけ、資源を持たない日本の置かれている立場を理解させたことは、大平さんの特筆すべき功績だと思う。また、この「東京サミット」が引き金となって、エネルギー問題の重要性が改めて確認され、消費節約と代替エネルギー開発の促進に一層拍車がかけられており、現在世界各国が具体的に展開するために努力していることは、大きな成果といえよつ。

大平さんの経済政策の前提は、行政の介入はできるだけ避け、民間の活力を生かさなければならぬとする、いわゆる「民間主導型経済」である。これによって、民間の努力で景気も自律的に回復し、また第二次石油危機も先進他国に比べてすみやかに、かつ適切に乗り切ったことも大きな功績であり、これらによって低成長経済に

入った日本経済を、安定成長軌道に乗せることにひとまず成功したといっても差し支えないと思う。

わけても、長期安定供給に全力を傾ける電力、都市ガスといった公益事業者の苦悩に特段の理解を示されたのは、わが国経済の根幹をなすエネルギーをいかに確保していくかその困難さを痛感されていたからだと思う。その意味で、大平さんはまさに、私の「心の支え」であった。

大平さんへの政治的評価、特に外交手腕は国内よりも外国の方が高いといわれているが、今日の激動している国際政治情勢下において、エネルギーを輸入に頼らざるを得ないわが国にとって今ほど強力な外交政策を展開する必要にせまられている時はないだけに、その死がなんとしても惜しまれてならない。イランの人質事件、ソ連のアフガン侵攻問題では、対イラン経済制裁、モスクワオリンピック参加拒否などにみせた 勇気ある決断、チトー大統領の訃報に接しては、カナダ訪問中でありながら急遽日程を変更してまでも国葬参列にかけつけた すみやかな対応 が、これからの日本にとって極めて大切であろう。

私が大平さんとたびたびお会いする機会を得たのは、大平総理を囲む会「春芳会」での会合である。その席で受けた印象は、政治家にありがちなハツタリがなく、周囲の人達の話にじっくりと耳を傾ける親しみのもてる人柄である反面、常に正論を説き頑固なまでの強い信念を持った人であった。また無類の読書家として知られているが、本の購入については他人まかせにせず寸暇を惜しんで自ら書店に足を運び、読みたい本を自分で選んでいったとうかがっている。常に幅広い知識を吸収しようとする姿勢と努力に加え豊富な経験によって培われた自信が芯のある人物を形成したのだと思う。「柔」と「剛」の両面を持ち合わせた、信頼のできる指導者だった。

首相就任以来、国の内外にわたって多事多端な時期に、「ご自分の時間を犠牲にしてまでも国務に奔走されたことが、ご存生を縮める結果となり、これは、いわば『殉職』ともいえるのではないかと思う。」（東京ガス社長）